

富山県総合運動公園内遺跡 試掘調査概要



1989年3月

富山市教育委員会

例　　言

1. 本書は、富山市教育委員会が実施した富山県総合運動公園建設予定地内の埋蔵文化財試掘調査概要である。
2. 調査は、富山県土木部都市計画課（総合運動公園建設班）の委託を受けて実施した。現地調査および報告書作成は、昭和63年6月20日から平成元年3月31月に行った。
3. 調査は、富山市教育委員会学芸員古川知明（試掘調査）、富山県埋蔵文化財センター主任久々忠義、同文化財保護主事安念幹倫（本調査）が担当した。
4. 調査にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導を得た。また、調査から報告書作成に至るまで次の方々や諸機関からご協力をいただいた。記して謝意を表したい。

秋山進午、安念幹倫、岸本雅敏、久々忠義、酒井重洋、田中　琢、藤井一二、宮田進一
桃野真晃、養田　実、安達志津、地元新保地区、任海地区、南中田地区、栗山地区、吉倉地区
5. 遺物の注記は「SUK」とし、次にトレーナー名（通し番号）、遺構名、遺物番号、日付の順に付した。
6. 遺物の実測および写真撮影は、山崎栄、清水延之、古川が行った。
7. 出土品および原図・写真類は、富山市考古資料館において富山市教育委員会が保管している。
8. 本書の執筆は古川が行った。

目　　次

I　調査の経緯.....	1	F　栗山椿原遺跡.....	25
II　遺跡の位置と環境.....	2	G　南中田C遺跡.....	27
III　発見された遺跡		H　南中田A遺跡.....	29
1　概要.....	5	I　南中田B遺跡.....	31
2　各遺跡の概要		J　吉倉A遺跡.....	32
A　任海遺跡.....	5	IV　発掘調査	
B　吉倉B遺跡.....	10	1　任海遺跡.....	34
C　任海砂田遺跡.....	15	2　南中田B遺跡.....	34
D　任海鎌倉遺跡.....	17	V　小　結.....	36
E　南中田D遺跡.....	19		

(表紙は、吉倉B遺跡出土墨書き土器)

I 調査の経緯

今回調査の対象地は、富山市の南部にあたる富山市新保・栗山・南中田地区約46ha内にある。

富山県都市計画課では、この区域を大規模運動公園として活用を図るため、陸上競技場・野球場等の施設建設設計画を策定し、計画を実現する方向に向った。これに伴い、計画区域内の埋蔵文化財の所在状況について把握する必要が生じたため、昭和62年5月～6月に富山市教育委員会および富山県埋蔵文化財センターが現地確認による分布調査を行った。

分布調査の結果、平安時代から近世を中心とする埋蔵文化財の散布地・墓地など6カ所、区域面積延べ16,510m²を確認した。

この結果に基づき、昭和62年7月20日、事業主体の富山県都市計画課、富山県埋蔵文化財センター、富山市の三者が参集協議した。そこでは、埋蔵文化財の保存方針を決定するのに必要な基礎資料を得るために試掘調査を、昭和63年度に実施することで合意に至った。

試掘調査は、昭和63年6月20日から昭和63年10月7日に富山市教育委員会が主体となって実施した。調査は、バックホウによる表土排土ののち、遺物包含層および遺構の確認作業を行った。試掘トレチは、地表面で遺物の散布の密な部分に任意に設定し、遺跡の広がりに応じて順次拡張した。試掘トレチは255か所を設け、延べ15,198m²の調査を行った。

調査の結果、10か所の埋蔵文化財包蔵地が確認された。

その後12月に至り、公園建設に先立つ周辺域の用排水路付替工事が計画され、2遺跡延べ259m²が工事区域内に含まれることが明らかになった。このため当該部分について、富山県埋蔵文化財センター調査員の派遣を受けて確認調査を実施した。調査は昭和63年12月7日～12月9日に行い、平安時代の穴などを検出した。



表土排土風景



遺構確認風景

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と歴史的環境

10か所の遺跡が所在する任海・栗山・吉倉・南中田地区は、富山市街地から南へ約7kmに位置し、市内を貫流する神通川とその右岸側支流熊野川にはさまれた扇状地上に立地している。標高は北端で33m、南端で39mを測り、南から北へ緩やかな傾斜を示している。

周辺の遺跡分布は、第2図に示したとおりである。立地条件から、遺跡の南西約500mにある神通川・熊野川複合河岸段丘（大沢野段丘）上に立地する一群と、扇状地上に立地する一群に大別される。

前者には、縄文時代中期の集落（伊豆宮II遺跡）と7世紀頃の古墳（伊豆宮古墳）がある。後者では、縄文晚期（悪王寺遺跡、大利屋敷遺跡、栗山A遺跡など）から始まり、奈良～平安時代に至って、主として神通川と熊野川に挟まれた地域に大集落（栗山A遺跡、総合運動公園内遺跡内遺



- 1 試掘調査地（10遺跡）
- 2 栗山A遺跡
(縄文晚期・奈良～平安)
- 3 大利屋敷遺跡
(縄文晚期・平安)
- 4 県営公害特別No.8遺跡
(近世)
- 5 伊豆宮II遺跡
(縄文中期)
- 6 円教寺裏遺跡
(平安～中世)
- 7 伊豆宮古墳（古墳）
- 8 福居古墳（古墳）
- 9 押上塚（中世）
- 10 悪王寺遺跡
(縄文晚期)

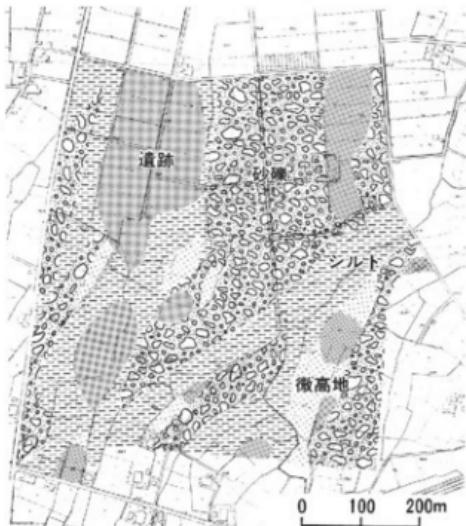
第1図 遺跡と周辺の遺跡

跡など)が形成されるようになる。

近世に至り、この地区の周辺には飛驒街道をはじめ八尾道、岩木道、舟倉道が通り、それらの分岐点がこの地区の周辺にあったと伝える。また、熊野川やその支流桶柄川には、舟着場等の伝承が残っており、水陸交通の要所であったことがわかる。

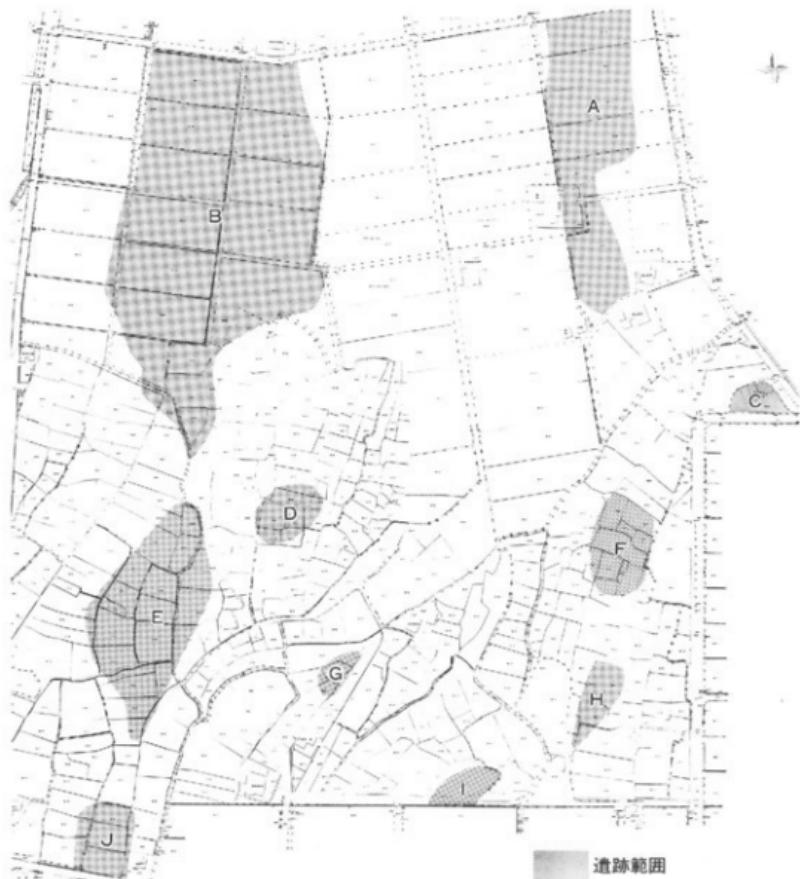
2 遺跡周辺の地形・地質 (第2図)

遺跡は、神通川と熊野川によってはさまれた扇状地上に立地している。遺跡のうち南中田D遺跡など西側のものは現在の神通川とわずか400m程度の距離である。遺跡周辺の水田耕土直下の地層は、主として、砂質土・シルト・砂礫に区分される。砂質土は、微高地



第2図 調査区内の地質区分

上に堆積しており、遺跡のほとんどはこの砂質土上に立地する。シルトは、微高地を取り巻く低地に堆積している。シルト中にも土器片等が含まれているが、磨滅しており、2次堆積をうかがわせる。礫は、大小のものがかなり密に堆積しており、洪水の際に堆積したものと推測される。西側の遺跡は微高地の地形に沿って比較的良好に残っているが、中央から東側の遺跡はその一部あるいはほとんどが礫によって断ち切られており、洪水によって破壊されたと考えられる。各層はいずれも南西から北東方向に堆積しており、神通川上流方向からの水流を示しているものと推測され、遺跡の形成には神通川がかなり大きく関わっていることがわかる。



第3図 発見された遺跡(1/5,000)

記号	遺跡名	面積	年代	種別	記号	遺跡名	面積	年代	種別
A	任海遺跡	13,300	平安～中世	集落跡	F	栗山桜原遺跡	3,550	平安～中世	集落跡
B	吉倉B遺跡	42,250	平安～中世	集落跡	G	南中田C遺跡	810	平安時代	土器廐棄跡
C	任海砂田遺跡	200	平安時代	遺物包含地	H	南中田A遺跡	1,420	平安～近世	道路・溝跡
D	任海鎌倉遺跡	1,900	平安～中世	集落跡	I	南中田B遺跡	1,420	平安時代	集落跡
E	南中田D遺跡	11,750	奈良～中世	集落跡	J	吉倉A遺跡	2,750	平安～中世	集落跡・墓地

III 発見された遺跡

1 概 要

試掘調査によって確認された遺跡は10遺跡（第1表）であり、いずれも地方道富山笹津線以東に存在する。

その内9遺跡は、平安時代を主体としたものであり、1遺跡は中世を主体としたものである。

出土した遺物は、約8,000点にものぼる平安時代の土師器・須恵器当のほか縁軸の土器類、土錘・鉄器等の製品、生産具（羽口・鉄岸）等、集落の生活を明らかにする遺物が発見されている。

2 各遺跡の概要

A 任海遺跡

調査の概要

分布調査で、土師器・須恵器が少量採集された地点である。

試掘トレンチ18か所、延べ948m²の調査により発見された遺跡の範囲は、南北260m、東西70m 面積13,300m²で、南北に狭長な形状である。

遺跡の東側および西側は、氾濫の痕跡と推定される大小の円礫等によって断ち切られており、遺跡はもと東西に広がっていたものと考えられる。南側は若干の礫があるものの緩やかに傾斜があって、シルト層の堆積が見られる。遺跡は、事業区の北側にも続いていることが推測される。

遺跡周辺は、過去の圃場整備によって上層部がかなり擾乱されたようだが、幸い遺構面は損傷を受けずに残っていた。

遺跡の主体は北半部にある。この部分での層序は、1層耕作土 2層黒色土 3層黄色砂質土で（地山）で、2層が遺物包含層、3層上面が遺構確認面である。北端では2層が薄くなる。

南半部は、2層に相当量の礫が入りこんでおり、一部遺構面を切りこんでいるところもある。

遺構面までの層厚は、北端部で25cm、中央部で30～50cm、南端で25cmである。

遺 構

穴、溝、道路跡や遺物集中地点が検出された。穴、溝、遺物集中地点は北半部に集中し、南半部では道路跡がある。

(1) 穴 土器を含む穴を16トレンチ南半で4か所、24トレンチで2か所検出した。穴は、直径20cmのピットから直径2mを超える大形もの、一辺6mの方形を呈する堅穴状のものがある。穴の覆土は黒色土である。

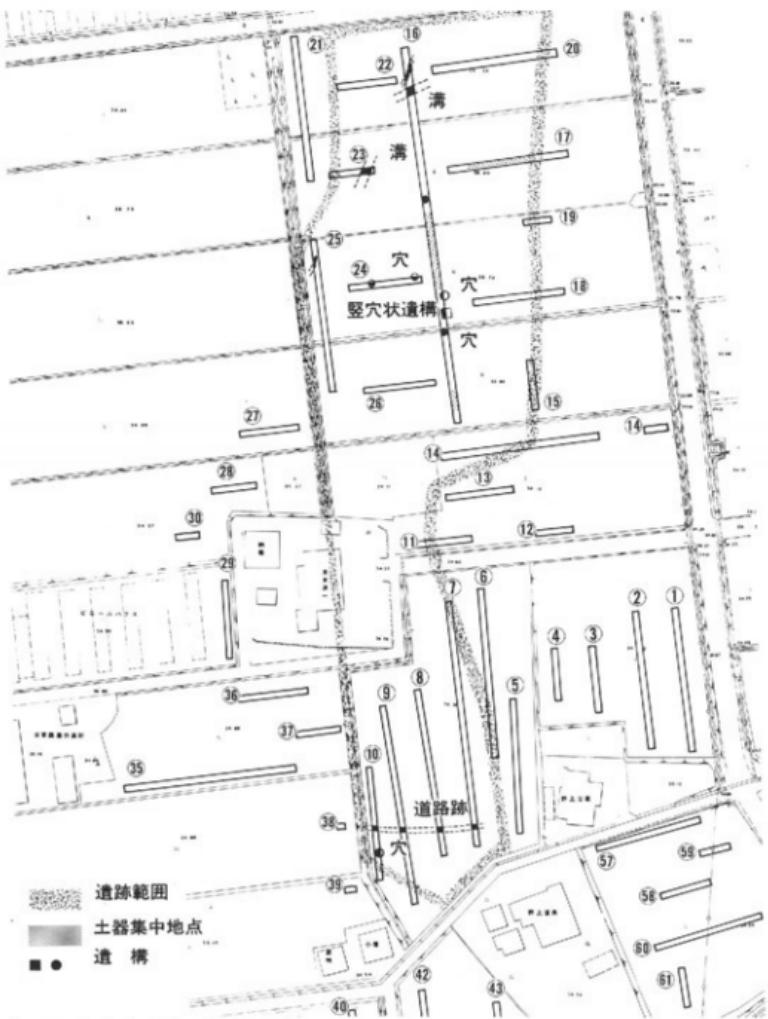
(2) 溝 16トレンチ北端で2条、23トレンチで1条を検出した。16トレンチの溝のうち大形のものは、幅約3mで覆土は黒色土である。溝は東西方向に延びている。この溝の続きと思われるものは23トレンチの東端で検出されている。ここでは幅3.5mで、北東～南西方向に延びている。

(3) 道路跡 遺跡南端で検出した。幅約50cmで、浅く窪み、かなり堅固に踏み固められている。

7・8・9・10各トレンチで検出され、延長約30mを確認した。道路の方向はほぼ東西である。

- (4) 遺物集中地点 北半部において2層中に土器集中地点を3か所確認した。いずれも100~200点以上の土師器や須恵器の集中が見られた。土器を取り上げた後遺構の検出を行ったが、明確にできなかった。

(5) その他の遺構 南半部において、隙を充満した穴を3か所確認した。性格・年代等は不明である。



第4図 任海遺跡発掘区(1/1,500)

遺物

土師器、須恵器、鉄滓1、中国製磁器2、珠洲焼、越前焼、近世陶器等が出土した。総数1,400点、整理箱8箱分になる。

- (1) 土師器 梗、甕がある。梗は糸切底で、高台の付くものがある。大形甕の口縁は、外反した端部の上端をつまみあげるもの、屈曲されるもの、端部を内側に折り返し肥厚させるものなどがある。
- (2) 須恵器 杯・杯甕・壺・双耳瓶がある。杯蓋は、直徑1.5~2cmの小形扁平なつまみがつく。端部は丸くおさめられ、内側にはわずかに段が見える程度のものが多い。高台付の杯には、高台が高さ2mmで丸く退化したものがある。
- (3) 中国製磁器(第5図) 青磁碗2点がある。外面に蓮弁文を浮彫りにしたものは、青灰色の釉がかけられ、器壁は厚めである。また、内面に片彫りの蓮華文様が施されるものは、緑がかつた灰色の透明度の高い釉がかけられ、器壁は薄い。
- (4) 珠洲焼 摻鉢がある。内面のオロシ目はかなり間隔をあけて引くもので、13世紀頃。

まとめ

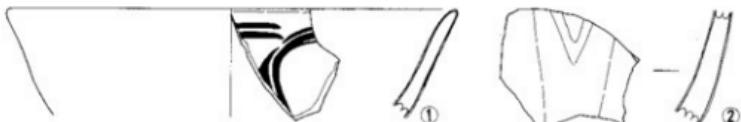
遺跡は、氾濫によってかなりの部分が流失しているが、遺構の存在する主体的な部分は残存する。

遺跡の性格については、北半部の遺構群は、堅穴住居と推定される方形の穴、柱穴状の穴等の存在から、集落遺跡と考えられる。その年代は、出土した土師器・須恵器から、主として平安時代前半期、実年代では9世紀中頃から10世紀初め頃のものと考えられる。土師器の一部には9世紀前半の古相をしめすものがあり、遺跡の成立は9世紀初めころと考えられる。

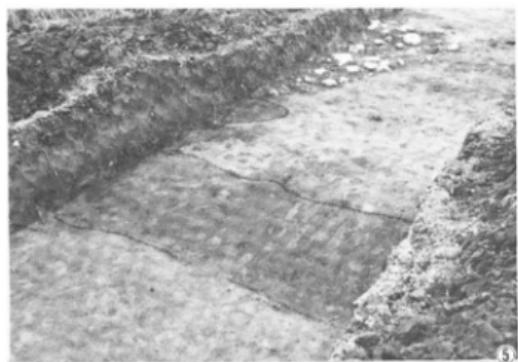
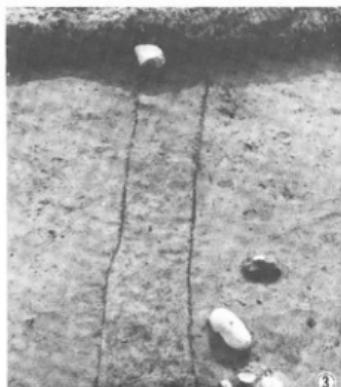
遺構の検出はなかったが、ここからは13世紀代の中国製磁器や珠洲焼が少量出土しており、中世の集落が存在する可能性がある。

南半部で検出された道路跡は、年代を明らかにする資料は得られなかったが、すぐ南を走る現在の農道付近に、任海で岩木道から分岐したかつての八尾道が走っていたとの伝承があり、これに該当するものと考えておきたい。

このように任海遺跡は、平安時代前半の集落構造を明らかにする上で重要であり、中国製磁器の出土も注目されるものがある。



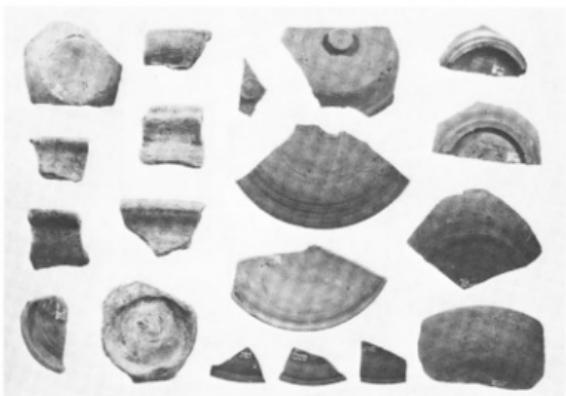
第5図 中国製磁器



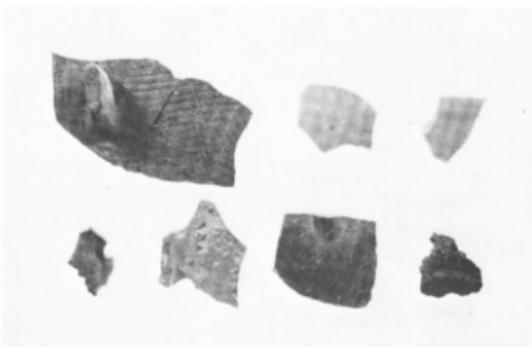
- ① 16 レンチ溝跡(北から)
- ② 25 レンチ溝跡(北から)
- ③ 9 レンチ道路跡(東から)
- ④ 16 レンチ中央上器集中
地点(南から)
- ⑤ 8 レンチ道路跡(南から)



16 トレンチ穴



土師器・須恵器



須恵器・中国製磁器



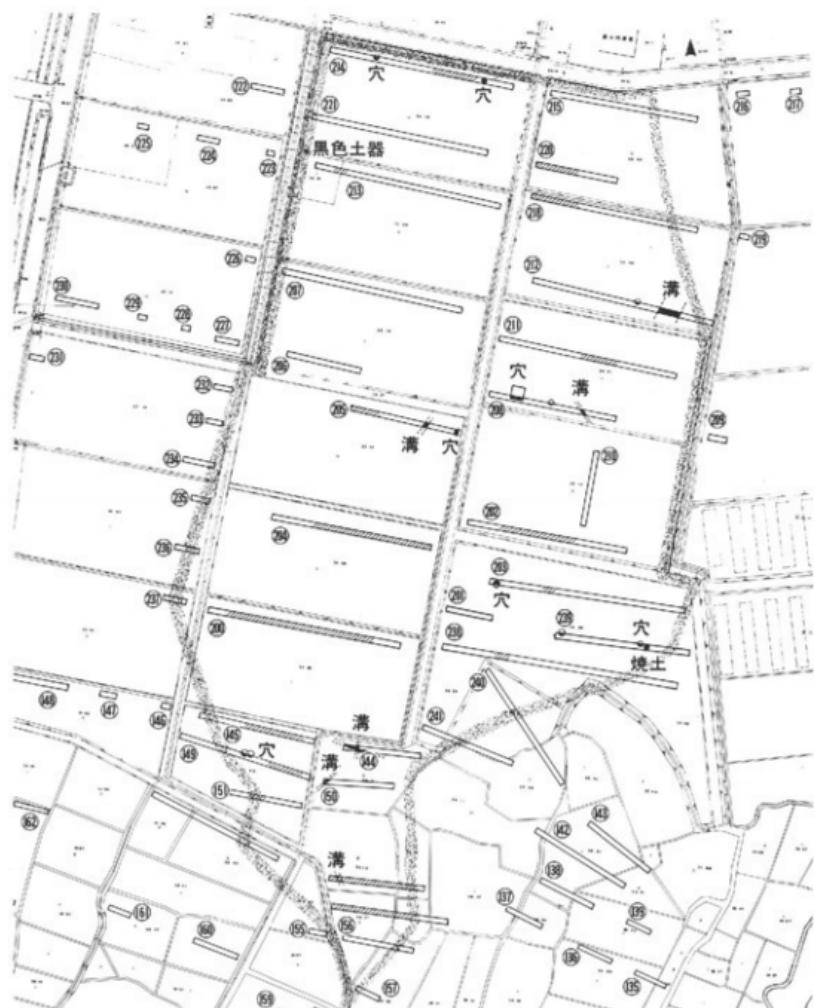
珠洲焼・越前焼

B 吉倉B遺跡

調査の概要

分布調査で、土師器・須恵器が集中的に採集された地点である。

試掘トレンチ38か所、延べ3,428m²の調査により発見された遺跡の範囲は、南北350m東西180m、



第6図 吉倉B遺跡発掘区(1/2,000)

面積42,250m²で、南北に長い形状である。遺跡は、さらに事業区の北側にも続いている。

遺跡の周囲は緩やかに傾斜して低くなってしまっており、シルト層が堆積する。

遺跡地は、過去に圃場整備が行われ、遺跡の東北部や南端では地山付近まで擾乱を受ける。

層序は、1層耕作土・2層黒色土・3層黄色砂質土で（地山）で、2層が遺物包含層、3層上面が遺構確認面である。遺構面までの層厚は、北端部で60cm、中央部で30～60cm、南端で30cmであり、遺物包含層の厚さは10～40cmで、南西部が良好な遺存状況を示している。

遺構

穴、溝、遺物集中地点、焼土が検出された。

- (1) 穴 各トレンチで検出した。穴は、直徑20～30cmの柱穴状のものが多く、炭化物を含むものがある。208トレンチ西寄りで検出した穴は、一辺約6mの方形を呈する堅穴状のものがある。穴の覆土は黒色土である。
- (2) 溝 遺跡東寄りの212トレンチで大型の溝1条を検出した。幅約8mで覆土は黒色土である。溝は南北方向に延びている。また、南端の144・150・153トレンチでも幅30cm～1mの溝が一部重複して検出された。
- (3) 遺物集中地点 各トレンチで2層中に土器集中地点を確認した。いずれも100点以上の土師器や須恵器の集中が見られた。土器を取り上げた後直徑20～30cmの柱穴状の穴を検出した部分がある。遺跡北部からは土師器椀が多く出土した。
- (4) 焼土遺構 238トレンチの東寄りにおいて、3層上面に20×30cmの赤色化した焼土を検出した。

遺物

土師器、須恵器、土鍤、土師質土器、珠洲焼、越中瀬戸焼が出土した。総数2,300点、整理箱14箱になる。注目されるのは、墨書き土器の出土である。

- (1) 土師器 梗・皿・壺がある。梗は、遺跡北部から多く出土した。糸切底で、高台の付くものがある。口縁端部を肥厚させるものと短く外反させるものがあり、後者が主体である。

梗の内面を黒色処理した黒色土器がある。内面は丁寧なヘラミガキがなされる。底部1点は高台付である。

大形壺の口縁は、外反した端部の上端をつまみあげるもの、端部を内側に折り返し肥厚させるものがある。

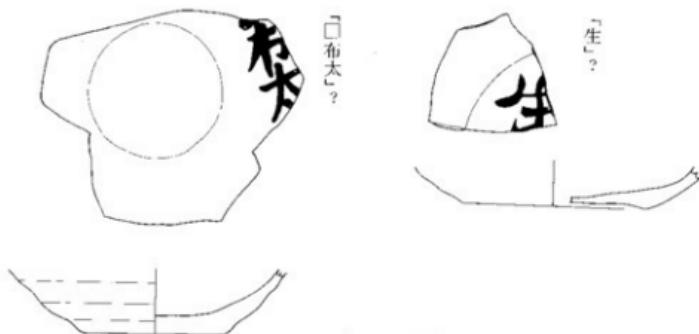
墨書き土器は4点が出土した。いずれも土師器梗の体部外面や底部に書かれている。

214トレンチ出土のものは、体部と底部にあり、体部は「匁」底部は「呂」であろうか。

221トレンチ出土のものは、黒色土器の底部にあり、「生」であろうか。

213トレンチ出土のものは、体部にあり、「十」であろうか。

200トレンチ出土のものは、体部にあり、「！」布？太」であろうか。



第7図 墨書き土器(1/2)

- (2) 須恵器 杯・杯蓋・壺蓋・壺がある。須恵器は遺跡南側の145トレンチ以南に多く出土した。杯蓋は、つまみがあるものとないものがある。前者にはやや扁平なつまみが付き、端部はシャープな作りで内側の段が鋭いもの、端部を丸く收め内側の段が浅いものがある。
- 杯は、体部が外へ開く無台杯と高台から体部がすぐに立ちあがる有台杯がある。
- (3) 珠洲焼 遺跡南端部からまとまって出土した。壺、片口鉢、擂鉢がある。片口鉢は、口縁が内湾する。擂鉢は内面のオロシ目との間隔が広い。いずれも13世紀頃と考えられる。

まとめ

遺跡は、ほぼ全体が良好に遺存している。出土土器の様相から、遺跡は145トレンチを境に南北に分けられる。

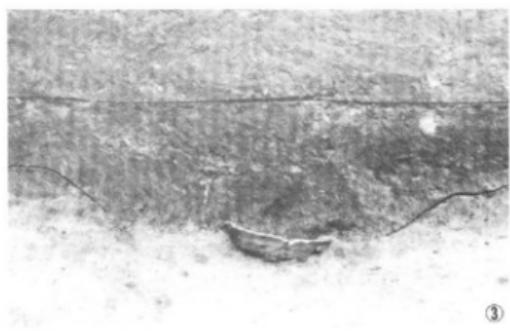
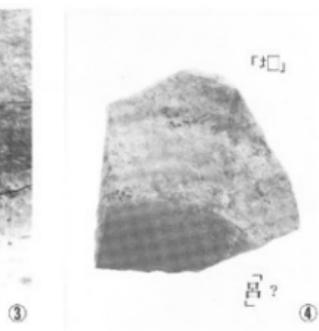
北側のブロックでは、墨書き土器があり、多くの土師器碗を出土する。須恵器は比較的少ないがつまみのない蓋がある。

南側のブロックでは、須恵器が多く、土師器はほとんど出土しない。また、珠洲焼、土師質土器等中世の遺物が出土する。

それぞれの存続年代は、北側ブロックは9世紀中頃から10世紀前半頃、南側ブロックは、9世紀初め頃から9世紀後半頃であり、南側ブロックでは8世紀後半にまで遡る可能性もある。

遺跡の性格については、北側ブロックでは竪穴住居と推定される方形の穴が208トレンチで検出されており、また柱穴状の穴等の存在から、集落遺跡と考えられる。南側ブロックでも同様だが、溝が多く検出され注目される。また遺構の検出はなかったが、土師質土器や13世紀代の珠洲焼が出土しており、中世の遺構が存在する可能性がある。

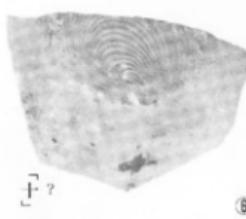
このように吉倉B遺跡は、平安時代前半の集落構造を明らかにする上で重要であるが、加えて墨書き土器の出土と遺跡の広さが遺跡の性格を考えるうえで注目されるものである。



③



⑤



⑥



⑦

①203トレンチ穴

②144トレンチ溝跡

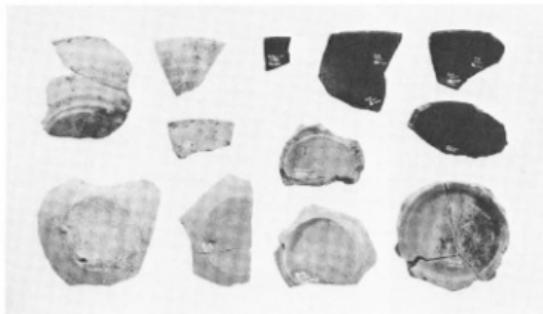
③203トレンチ須恵器出土状況(No. 8)

④～⑦墨書き土器

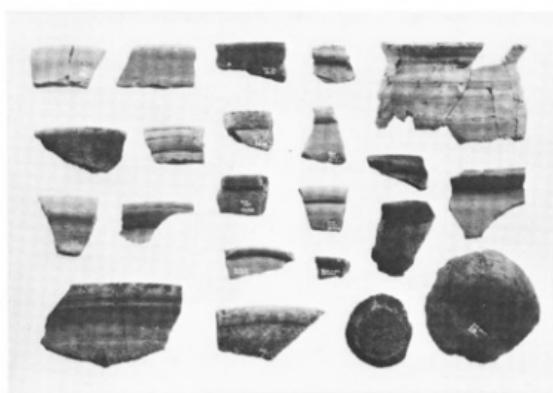
⑧須恵器杯



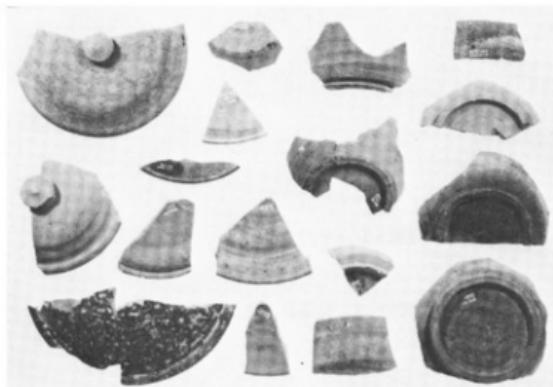
⑧



土師器杯
黑色土器



土師器甕



須惠器杯

C 任海砂田遺跡

調査の概要

分布調査では、この周囲で土師器を少量採集している。

試掘トレチ 3 か所、延べ 110m² の調査により発見された遺跡の範囲は、東西 50m 南北 25m、面積は 1,100m² である。遺跡範囲はさらに南側に広がるものと考えられる。このうち工事（道路）に係る部分は、約 200m² である。

遺跡の北側は一段低くなっている、微高地にあることがわかる。西側は、緩やかに傾斜し、氾濫と推定される大小の円錐等の堆積に至る。

層序は、1 層耕作土 2 層黒色土 3 層黄色砂質土で（地山）で、2 層が遺物包含層である。地山までの層厚は 40cm で、北側に向って厚くなる。

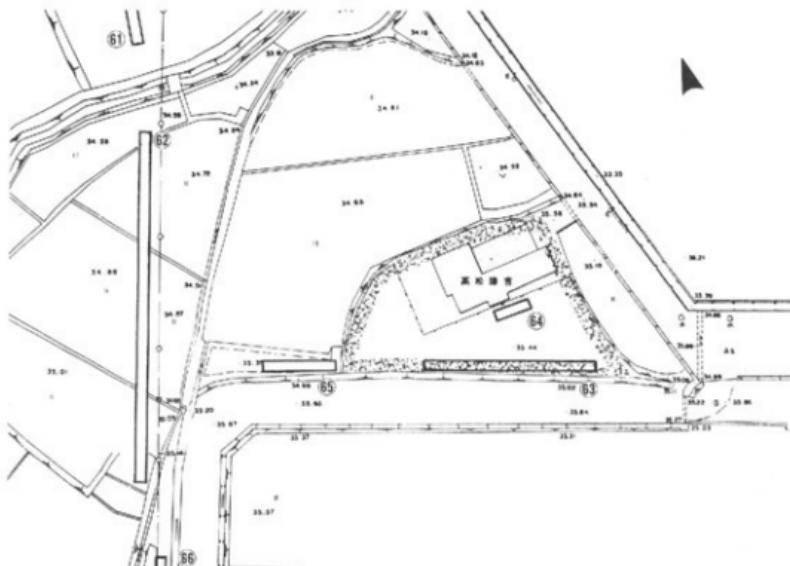
遺構

遺物集中地点 63・64 トレチの 2 層中に土器集中地点を検出した。土師器や須恵器が約 150 点出土した、土器を取り上げた後遺構の検出を行ったが、確認できなかった。

遺物

土師器、須恵器、近世陶器がある。

(1) 土師器 梶・甕・鍋がある。大形甕の口縁は、外反した端部の上端が短く立ちあがるもの、端部を丸く肥厚させ内側に段が付くものなどがある。



第 8 図 任海砂田遺跡発掘区(1/1,000)

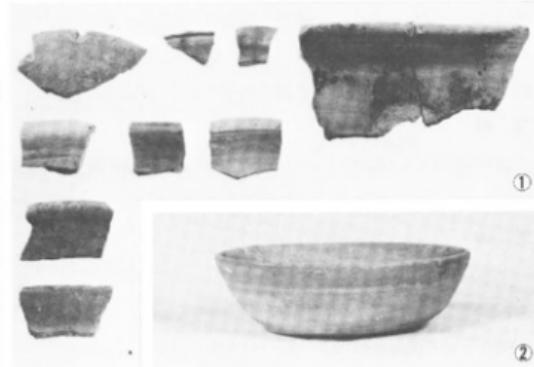
(2) 須恵器 杯・杯蓋・壺がある。杯蓋はつまみがつくもので、端部がシャープなものと、端部を丸くおさめ内側にわずかにかえりの痕跡が見える程度のものとがあり、後者が多い。

まとめ

遺跡は遺物集中地点を確認したのみであったが、他の遺跡同様、集落跡の一角と考えられる。出土した土師器・須恵器から、遺跡は9世紀後半を中心で営まれたようだが、須恵器杯蓋に8世紀後半から9世紀前半に遡る様相のものがあり、遺跡の成立は9世紀後半以前になるものと考えられる。



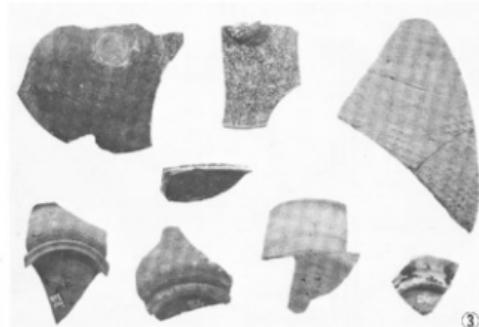
63トレンチ(東から)



任海砂田遺跡出土土器(①土師器②須恵器)



64トレンチ(西から)



出土土器(③須恵器)

D 任海鎌倉遺跡

調査の概要

分布調査で、珠洲焼が採集された地点である。

試掘トレンチ 4 か所、延べ424m²の調査により発見された遺跡の範囲は、60m×40m、面積1,900m²で、北東—南西方向に長い形状である。

遺跡の西側は緩やかに傾斜して低くなっている、シルト層が堆積する。その他は氾濫の痕跡と思われる疊によって覆われる。遺跡の東側では 2 層黒色土遺物包含層中にかなり疊が混在する。

3 層黄色砂質土（地山）中にも比較的疊が多い。遺構面までの層厚は、中央部で 40～50cm、南端で 25～30cm を測る。

遺構 穴、溝、遺物集中地点が検出された。

- (1) 穴 竪穴状の穴を 126・127 トレンチで検出した。126 トレンチは一辺 3.5m、127 トレンチは一辺 5 m 検出した。また、直径 1.5m の円形の穴、長径 2 m の楕円形の穴各 1 か所の他、規模不明の穴多数を検出した。これらの遺構上面からは多くの土器が出土した。
- (2) 溝 126 トレンチで南北方向に延びる溝 1 条を検出した。幅 1～1.5m で覆土は黒色土である。
- (3) 遺物集中地点 128 トレンチで 2 層中に土器集中地点を確認した。土師器や須恵器が疊と混在して出土した。

遺物

土師器、須恵器、珠洲焼、越前焼が出土した。総数 370 点、整理箱 3 箱分になる。



第 9 図 任海鎌倉遺跡発掘区(1/1,000)

- (1) 土師器 梱・甕がある。梱は糸切底で、硬質なものが多い。体部はかなりそとに開き、器高は低い。大形甕の口縁は、外反した端部を内側に長く折り返し肥厚させるものである。
- (2) 須恵器 杯蓋・壺がある。杯蓋はつまみがなく、丁寧なヘラケズリによって外面を整形する。
- (3) 珠洲焼 甕、片口鉢、擂鉢がある。擂鉢は内面のオロシ目を縦横に間隔を開けて引くものがあり、12世紀後半のものと考えられる。
- (4) 越前焼 甕の底部がある。

まとめ

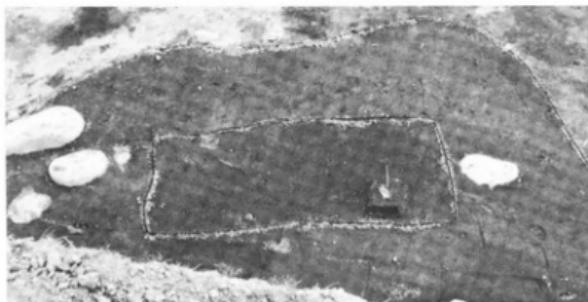
遺跡は、東半に氾濫の痕跡と思われる礫が入りこんでおり搅乱されてはいるが、西半では遺構が良好に遺存している。

遺跡の性格については、堅穴住居と推定される方形の穴が検出されており、また柱穴状の穴等の存在から、集落遺跡と考えられる。また遺構の検出はなかったが、中世陶器が出土しており、中世の遺構が存在する可能性がある。遺跡が形成されたのは、土師器、須恵器の型式から10世紀中頃と思われる。その後12世紀後半以後再び何らかの形で遺跡が形成されたようである。

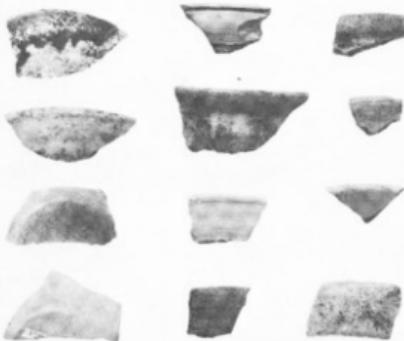
なお、分布調査時に本遺跡の南側や東側に壕状の礫積が認められたが、地元では水田耕作時に積み上げたものと伝え聞くという。



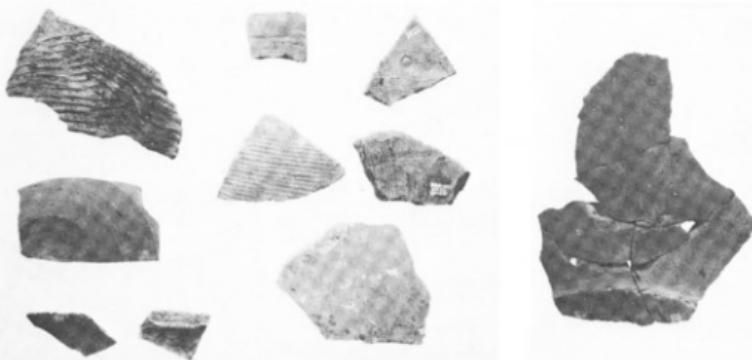
126 レンチ
穴(東から)



127 レンチ
穴(南から)



土師器杯



土師器・須恵器・珠洲焼・越前焼

越前焼

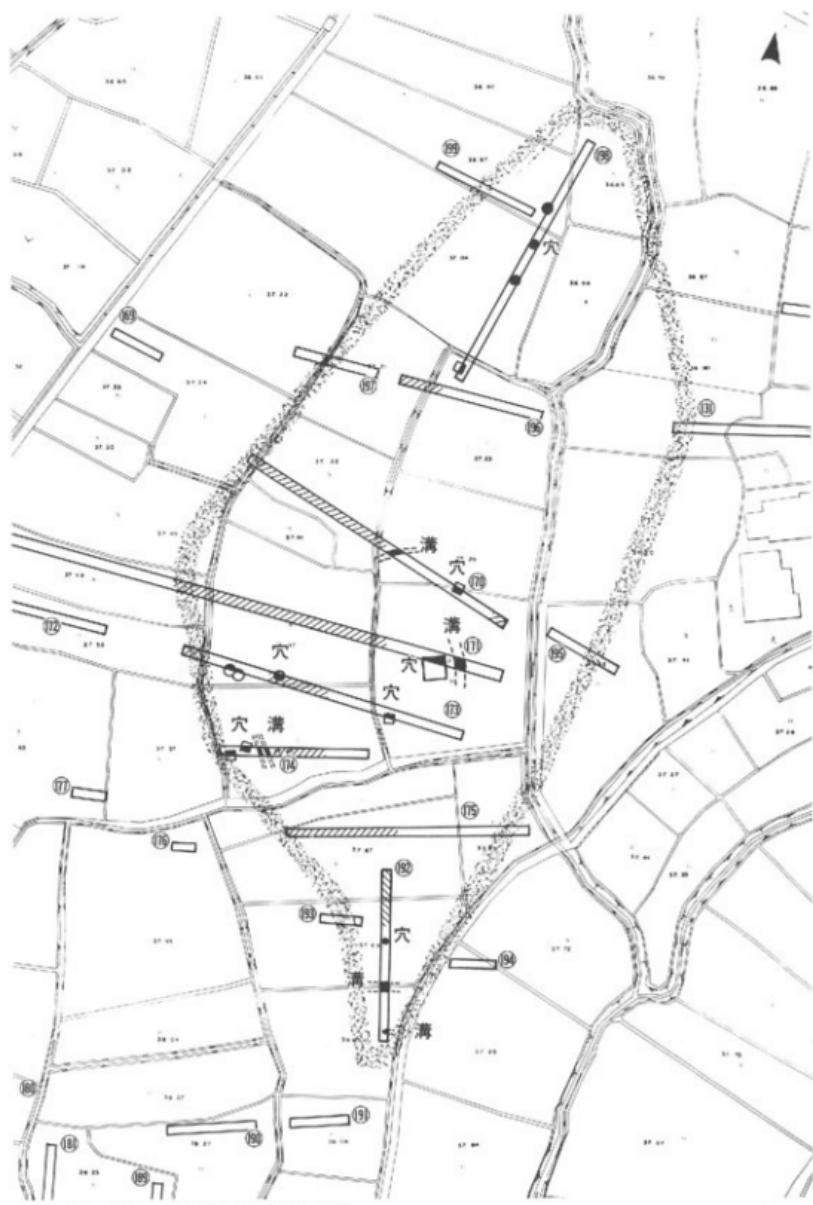
E 南中田D遺跡

調査の概要

分布調査で、土師器、須恵器が少量採集された地点である。

試掘トレンチ12か所、延べ1,065m²の調査により発見された遺跡の範囲は、東西90m南北200m、面積11,750m²で、南北に長い形状である。

遺跡の周囲は緩やかに傾斜して低くなってしまっており、シルト層が堆積する。層序は、1層耕作土、2層黒色土、3層黄色砂質土で（地山）で、2層が遺物包含層である。遺構面までの層厚は40cmである。



第10図 南中田D遺跡発掘区(1/1,200)

遺構 穴、溝、焼土、遺物集中地点が検出された。

- (1) 穴 遺跡全体に分布する。柱穴状のもの、円形・方形のもの各種がある。直径30~50cmの穴には、覆土に炭化木片を含むものが多い。
- (2) 遺物集中地点 遺跡の西側半分に遺物が集中する。171トレンチで最も密度が高く、250点の土師器、須恵器等が出土した。
- (3) 溝 遺物集中地点の周間に多く確認した。

遺物

縄文土器？1点、土師器、須恵器、土錘、鉄器、古瀬戸、珠洲焼、越前焼、越中瀬戸焼が出土した。総数2,200点、整理箱20箱分になる。また、遺跡北端から大小の礫に混じって五輪塔部分が出土した。注目されるのは、墨書き土器の出土である。

- (1) 土師器 梗・皿・甕・鍋がある。梗は、体部を薄く口縁を厚くするものと、口縁上端部が短く外反するものとがある。前者には赤彩が施されている。

長胴の大形甕の口縁は、短く屈曲させるものと端部を折り返し丸く肥厚させるものとがある。前者には頸部内外面にハケメが残る。小形甕の底部外面はケズリが著しい。底部内面を丁寧に磨いて黒色処理するものがある。

鍋は口縁が短く外反し、端部に面取りを行う。

墨書き土器は4点ある。梗の体部・底部、皿の外面に書かれている。梗の底部のものは「出？」皿は「土」であろうか。ほかは判読不能である。

- (2) 須恵器 杯・杯蓋・壺・大甕がある。杯蓋端部はシャープに逆三角形になるものと丸く扁平に終わるものがあり、年代差がある。
- (3) 鉄製品 刀子1点、角釘1点がある。
- (4) 珠洲焼 甕・片口鉢・擂鉢がある。片口鉢の内面は波状の櫛目文を縦に引くもので、13世紀後半頃のものである。擂鉢は内面のオロシ目を少し間隔を開けて引くもので、14世紀頃のものである。
- (5) 瀬戸焼 非クロクロ整形壺の肩部片で、3条の沈線が2か所にめぐる。

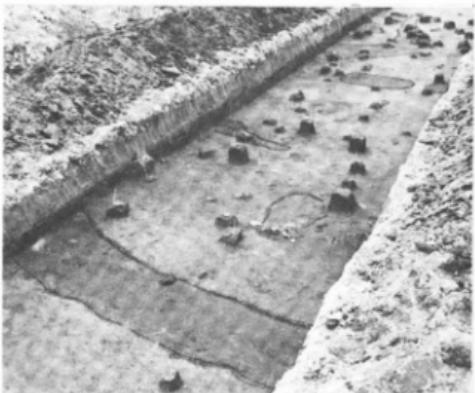
まとめ

本遺跡では、出土土器から、奈良時代8世紀後半と平安時代9世紀後半から10世紀中頃の2度にわたり集落が営まれたことがわかる。これは北側に接する古倉B遺跡の集落と年代がほぼ一致するもので、本来同一遺跡であった可能性がある。2遺跡間に介在するシルト層の形成年代が問題として残されるが、ここでは別個の遺跡として取り扱っておきたい。

遺跡からは多くの古代土器とともに中世陶器、近世墓石も出土しており、古代で廃絶した集落跡がその後どのようなかたちで利用されたのかを知る上で注目される遺跡である。



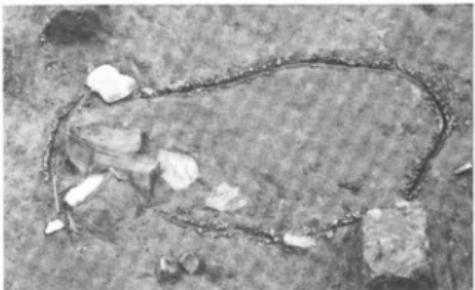
174 トレンチ遺構(西から)



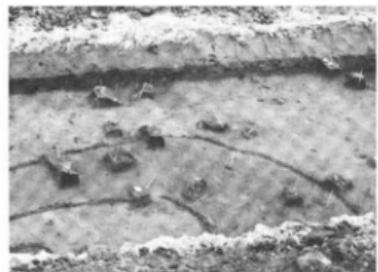
171 トレンチ遺構・遺物(西から)



170 トレンチ穴(北から)



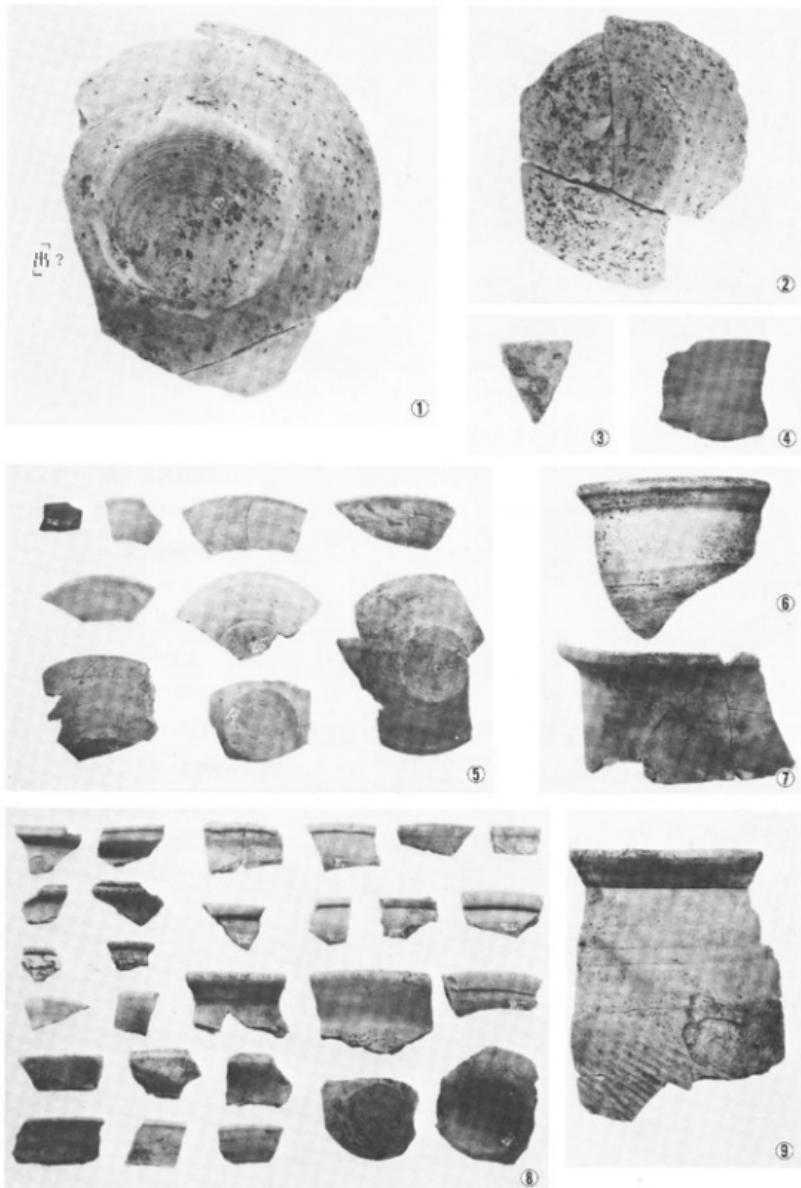
171 トレンチ焼土・土師器発検出状況



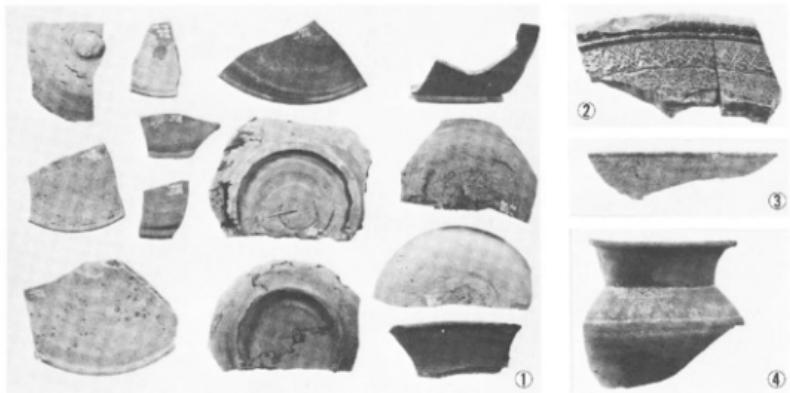
171 トレンチ溝検出状況



198 トレンチ北端出土の五輪塔



①～④墨書土器、⑤土器器椀・皿、⑥鍋、⑦～⑨甕



南中田口遺跡・出土遺物

①須恵器杯・壺

②、③須恵器 壺

④須恵器 壺

⑤珠洲焼

⑥瀬戸焼

⑦、⑧越中瀬戸焼

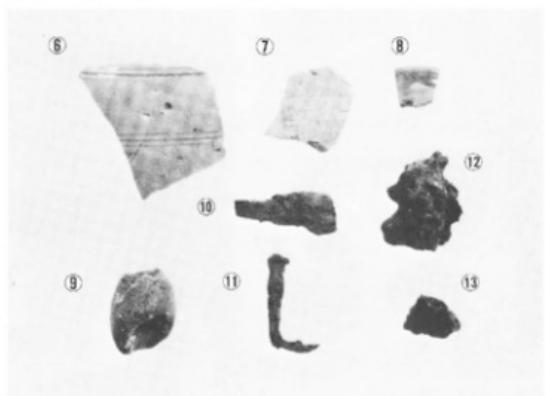
⑨土錘

⑩刀子

⑪角釘

⑫鉄滓

⑬繩文土器



F 粟山楮原遺跡

調査の概要

分布調査で土師器を多く採集した部分である。

試掘トレンチ 9 か所、延べ1,200m²の調査により発見された遺跡の範囲は、東西50m南北90mで、面積は3,550m²である。

遺跡の西側は緩やかに傾斜して低くなっている、シルト層が堆積する。この緩傾斜部分には、大小の円礫が溝状に堆積し、小河川跡と推定される。

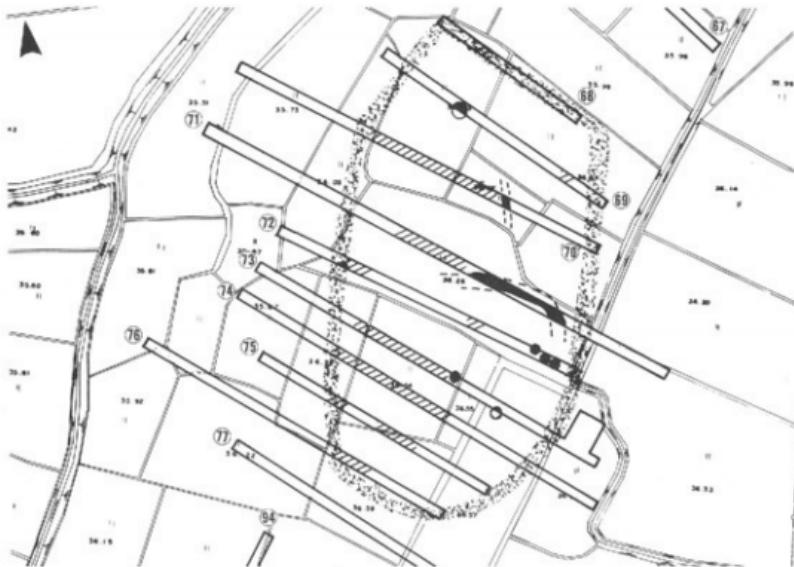
層序は、1層耕作土 2層黒色土 3層黄色砂質土（地山）で、2層が遺物包含層である。地山までの層厚は40cmで、北端部および西部では厚くなる。

遺構 穴、溝、遺物集中地点が検出された。

- (1) 穴 竪穴状の穴、方形の穴、柱穴状の小ビット多数を検出した。遺構は中央から西側に集中する。
- (2) 溝 71トレンチで屈曲する溝を検出した。幅1mで覆土は黒色土である。
- (3) 遺物集中地点 70～73トレンチ西半を中心に、2層中に土師器や須恵器の集中が見られた。

特に土鍤12点の出土が注目された。土器等の下には溝、穴等の遺構が存在する。

遺物 土師器、須恵器、土鍤、羽口、鉄製品、珠洲焼、越中瀬戸焼が出土した。遺物総数1,600点、整理箱12箱分になる。墨書き土器の出土が注目された。



第12図 粟山楮原遺跡発掘区(1/1,000)

- (1) 土師器 梶・皿・壺・黒色土器がある。梶は糸切底で、硬質なものが多い。体部はかなり開き、口縁は短く外反する。口唇内面や底面内部に灯芯痕を残すものがある。大形壺の口縁は、端部を丸く肥厚させ内側に段が付くものである。
- 墨書きは梶底面にあるが、判読不能である。
- (2) 須恵器 杯・杯蓋・双耳瓶・短頸壺があるが、数量は少ない。杯蓋の端部はシャープな三角形になるものと、丸くおさまるもの、扁平になるものがある。双耳瓶は、耳が胴部下半まで長くのびる形態である。
- (3) 土鍤 土師質のもの12点が出土した。形態は2種がある。A種は算盤玉形で、径5mmの孔が貫通する小形品である。B種は円筒形で、径1~1.5cmの孔が貫通する大型品である。
- (4) 鉄製品 刀子1点、鍔と思われるものの中茎2点がある。
- (5) 珠洲焼 片口鉢がある。

まとめ

遺跡は、吉倉B遺跡等と同様平安時代を中心とした集落跡である。出土した土師器・須恵器は9世紀後半から10世紀中頃にかけてのものが主体で、わずかながら8世紀後半の須恵器蓋があり、遺跡の成立は8世紀後半頃になるものと考えられる。



71トレンチ遺構検出状況(東から)



73トレンチ検出状況(東から)



70トレンチ土器出土状況(東から)



75トレンチ土器出土状況



栗山権原遺跡出土遺物(①③④土師器、②墨書き土器、⑤鉄器、羽口、土錘)

G 南中田C遺跡

試掘調査により新たに発見された遺跡である。

試掘トレンチ4か所、延べ182m²の調査により発見された遺跡の範囲は、45m×20m、面積810m²で、北東—南西方向に長い形状である。

遺跡の西側は緩やかに傾斜し、シルト層が堆積する。その他は氾濫と推定される大小の円礫等が堆積する。特に東側の堆積が厚く、遺物包含層はこの際の上に堆積する。

層序は、1層耕作土 2層黒色土 3層黄色砂質土（地山）である。遺跡東側に堆積する礫層は3層以前に形成されたものである。

遺構 溝、遺物集中地点がある。

(1) 溝 114トレンチで一辺5.5mのコの字の溝を検出した。性格は不明である。

(2) 遺物集中地点 113トレンチで2.5m×2.2mの範囲に土器の集中出土があった。検出部分はト

レンチ東側に堆積する礫の末端部で、この礫上から土師器、須恵器がまとまって出土したものである。土器は須恵器大甕片が主体を占め、土師器壺、須恵器杯・長頸壺が少量出土した。

遺物 土師器・須恵器・土錠 1 点がある。須恵器は300点が出土した。整理箱 6 箱分になる。

- (1) 土師器 壺がある。口縁は短く外反し、端部は少しつまみ上げられる。
- (2) 須恵器 大甕がほとんどである。口縁は短く外反し、薄く外側へ折り返す。段の下には波状文が一条施される。焼成は悪く、黄白色を呈し、もろい。出土したほとんどはこの個体に属する。
また、口縁端部を内側に折り返し、肥厚させるものがある。



まとめ

須恵器の出土状況は、数個体分が狭い範囲に面まっており、一時に廃棄したことを見ている。

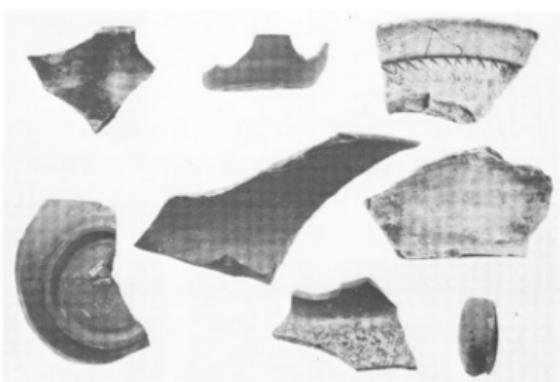
土器の年代は、8世紀後葉から9世紀初めにかけてのもので、廃棄のあったのは、9世紀初めの頃と推定される。

土器や第3層地山層は、113トレンチの土層観察から、氾濫の疊上に堆積している。このことは、氾濫が9世紀以前にあったことを示すものであり、またそれが氾濫後間もない時期に行われたと考えることができる。

土器廃棄跡は、113トレンチで検出したものが中心部で、周囲にはあまり広がらないものと思われる。



土器出土状況(南から)



南中田C遺跡出土遺物

H 南中田A遺跡

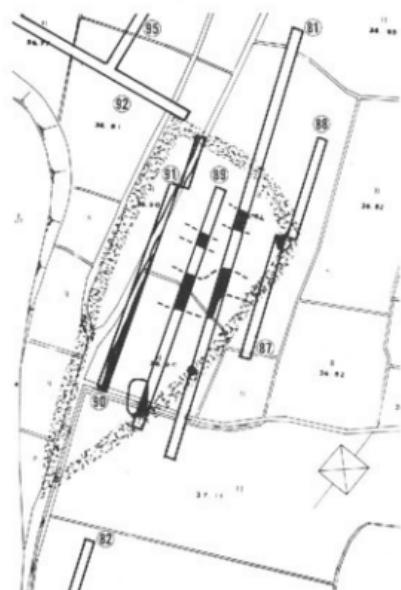
調査の概要

試掘調査により新たに発見された遺跡である。

試掘トレンチ6か所、延べ471m²の調査により発見された遺跡の範囲は、70m×30m、面積1,420m²で、南北に長い形状である。

遺跡は南中田C遺跡と同一の微高地上にあり、約50m離れている。遺跡の東側は、氾濫に伴うと考えられる灰色粗砂が堆積する。層序は、1層耕作土 2層黒色土 3層黄色砂質土(地山)で2層が遺物包含層である。遺構面までの層厚は40~50cmである。

遺構 穴、溝、道路跡が検出された。



第14図 南中田A遺跡発掘区(1/1,000)

(1) 穴 89トレンチで炭化物を含む穴を確認した。また各トレンチでも円形・方形の穴を検出しているが、伴出遺物はない。

(2) 溝 90トレンチで南北にのびる溝を検出した。幅1~1.5mで、覆土上層に土器を少量含む。溝は北側で道路跡に接し、これと平行して延びていく。

81、89トレンチの溝は東西に延びるもので、最大幅6mと大形である。

(3) 道路跡 90トレンチで南北にのびる溝を検出した。溝の覆土を剥ぐと、固くしまった黄色土面が現われた。中央が皿状に浅く窪み、固く締まる状況は任海遺跡の道路跡と同じであり、これも道路跡と考えられる。この固い面はさらに南北へ続いている。また、この道路跡の両側には溝、もしくは落ち込みがあり、これとの関連が堆定される。



90トレンチ・溝・道路跡(南から)



89トレンチ遺構(北から)



出土遺物(①土師器、②須恵器、③鉄器)

遺物 土師器、須恵器、鉄製品、土師質土器計21点ある。土師器は椀・甕がある。甕の底部には糸切り痕がある。鉄製品は、刀子の中茎と思われるもの1点がある。土師質土器は小皿がある。遺物はいずれも細片である。

まとめ

遺跡は、道路跡を中心に、これに関連する溝があるほか、若干の穴がある。他の遺跡のような集落に關係する遺跡とは異なる。

この道路跡については、これに當る部分が現在高い畦畔になって残っており、地元では飛驒街道分岐道の岩木道と伝えるが、定かではない。

遺物は、平安時代全般にわたるもののが少量ずつ出土しているが、道路跡や溝の年代を明らかにする資料としては乏しい。

I 南中田B遺跡

試掘調査により新たに発見された遺跡である。

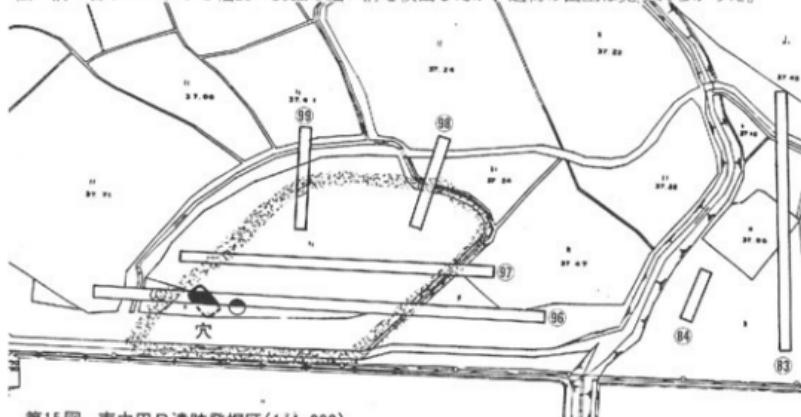
試掘トレンチ4か所、延べ378m²の調査により発見された遺跡の範囲は、35m×40m、面積1,420m²で、北東—南西方向に長い形状である。遺跡はさらに南へ広がる。

遺跡の周囲は緩やかに傾斜して低くなり、シルト層が堆積する。

層序は、1層耕作土 2層黒色土 3層黄色砂質土（地山）である。地山までの層厚は30~40cmを測る。

造構 穴、溝がある。

- (1) 穴 96トレンチ西寄りで4m×5mの方形堅穴状の穴、径2.5mの円形の穴を検出した。黒色土の覆土から土器の出土がある。
- (2) 溝 各トレンチから幅20~30cmの細い溝を検出したが、遺物の出土は見られなかった。



遺物 土師器、須恵器、珠洲焼、青磁が出土した。総数200点、整理箱4箱分になる。

- (1) 土師器 壺・鍋がある。壺の口縁は、外反した端部を面取りするものである。
- (2) 須恵器 杯・杯蓋・盞がある。杯蓋は、端部がやや丸くなるものである。
- (3) 珠洲焼 片口鉢、擂鉢がある。擂鉢は内面のオロシ目少し間隔を開けて引くもので14世紀代のものである。
- (4) 青磁 梶と思われる。縁がかった灰色の釉がかかる。



96トレンチ穴(南から)



出土土器

まとめ

遺跡は、9世紀前葉を中心とした集落跡と考えられる。遺構数が少ないので、遺跡の中心部分がより南側にあるためであろうか。90トレンチで確認した穴は、竪穴住居跡と考えられる。

土器の年代は、8世紀末から9世紀前半を中心とするものである。

○ 吉倉A遺跡

調査の概要

分布調査では、この周囲で土師器を少量採集している。

試掘トレンチ6か所、延べ383m²の調査により発見された遺跡の範囲は、東西50m南北60m、面積は2,750m²である。遺跡範囲はさらに南側に広がるものと考えられる。このうち工事区域は、約2,500m²である。

遺跡は微高地にあり、周囲は緩やかに傾斜して低くなり、シルト層が堆積する。西側では一部礫が混じる。層序は、1層耕作土 2層黒色土 3層黄色砂質土で（地山）で、2層が遺物包含層である。地山までの層厚は40cmである。

遺構 183トレンチで方形の穴の重複を認めた。東側で検出した穴の1つは1.5×1.2mの方形のもので、覆土に珠洲焼や炭化物を含む。西側で検出したものは1辺3mの方形で、覆土に土師質土器・珠洲焼を含む。この他柱穴状も認められる。

遺物 土師質土器、珠洲焼がある。

- (1) 土師質土器 梶・皿がある。皿は灯明皿で、油煙痕が付着する。

(2) 珠洲焼 廃・片口鉢がある。

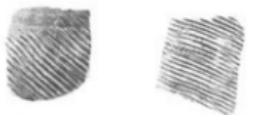
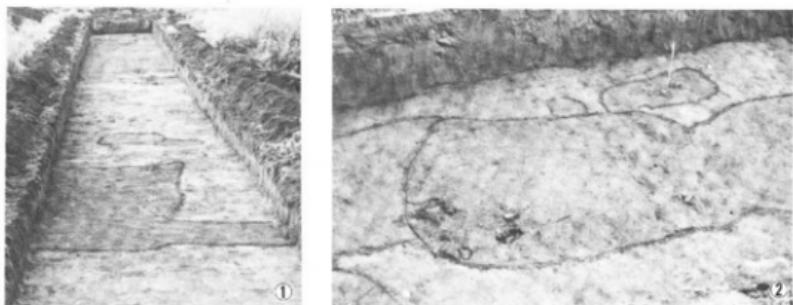
まとめ

遺跡は、柱穴状の穴の存在から集落跡と考えられる。また珠洲焼を含む穴の存在は墓地の可能性がある。出土した土器は13世紀後半頃のものであり、遺跡の成立もその時期になろう。

本遺跡は、今回発見された10遺跡の中で唯一中世期の単純遺跡である。



第16図 吉倉A遺跡発掘区(1/1,000)



③

①183トレンチ穴(西から) ②同穴(北から) ③185トレンチ穴 ④出土遺物

IV 発掘調査

1 任海遺跡

調査の概要 遺跡北端部において用排水路工事に伴う発掘調査を行った。181m²を対象とし、重機による表土排土ののち遺構の調査を行った。調査部分での層序は、1層耕作土（厚さ15cm）2層疊層（10cm）3層茶黒色土（20cm）4層黄色砂質土（地山）である。

遺構 ピット、溝がある。調査区西半部で直径20～40cmの円形ピットを6基検出した。そのうち35×40cmのピット2からは、土師器椀が1点出土した。またピット周辺から黒色土器が出た。溝は、調査区中央付近にあり、幅60cm深さ20cmのものが南北に走る。

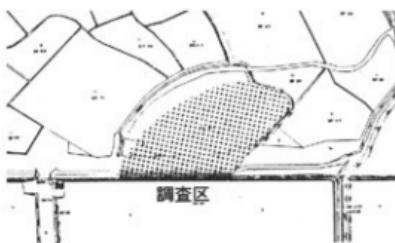
遺物 土師器椀、黒色土器各1点がある。

椀は底部片で、外面に糸切り痕が残る。黒色土器は椀底部片で内面を丁寧に磨いて黒色処理を行う。底部外面に糸切り痕が残る。

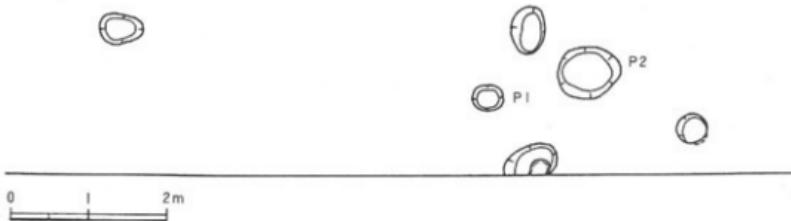
土器は平安時代のものと考えられる。



第17図 任海遺跡調査区(1:1,500)



第18図 南中田B遺跡調査区(1:1,500)



第19図 任海遺跡遺構平面図(1/80)

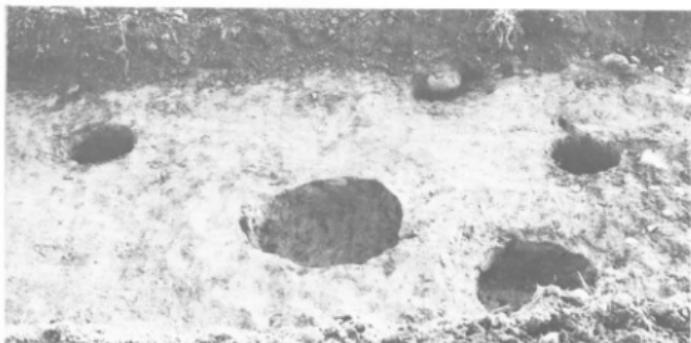
2 南中田B遺跡

調査の概要 遺跡南端部において用排水路工

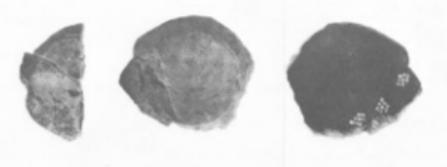
事に伴う発掘調査を行った。78m²を対象とし、重機による表土排土ののち遺構の調査を行った。調査部分での層序は、1層耕作土（厚さ30cm）2層盛土（15cm）3層茶褐色粘土（10cm）4層黄色砂質土（地山）であり、土器は3層から出土した。遺構の検出はなく、土師器甕1点、須恵器杯・杯蓋・壺計5点が出土した。土器は平安時代初めのものと考えられる。



任海遺跡 ピット検出状況(東から)



同 ピット(北から)



任海遺跡 出土土器(1/3)

V 小 結

今回調査で、公園建設区域内に、奈良時代から中世にわたる遺跡10か所が発見された。各遺跡は、後世の河川の氾濫により破壊された部分も多いが、なおかなりの面積に遺構が良好な状態で保存されており、今後の調査により遺跡の歴史的意義が明らかにされるものと思われる。

遺跡の多くは、平安時代前半、8世紀末から10世紀中頃にわたりて営まれた集落跡で、中心となる年代は9世紀後半から10世紀前半である。この地域では、本遺跡群の他、栗山A遺跡など平安前半期に集落が突然増加するといった現象をみせる。そして集落の規模もかなり大きい。

また、墨書き土器の存在から、少なくともこの時期にこの周囲で莊園の形成があったと推測してよいと思われる。

さて、この任海地区を中心とした地域は、中世後期には「宮川庄」の範囲に含まれる。それ以前については史料が存在しないので明らかでないが、一つの可能性として、「上賀茂（賀茂別雷）神社領新保御厨」があげられる。御厨は、延喜2（902）年以後伊勢神宮と賀茂神社の莊園に限って呼称されるもので、越中国に伊勢神宮領弘田御厨、同射水御厨、同鷲坂御厨、上賀茂（賀茂別雷）神社領新保御厨の名がみえる。「新保御厨」は、寿永3（1184）年の後白河法皇の院宣が初見であるが、成立はそれ以前に遡ると思われる。その比定地については、富山市新保説と滑川市魚駒周辺説がある。いずれも地名や賀茂神社の所在等による議論がなされてはいるが、考古資料等による検証もなされないまま、決着を見ていない。

寿永3年頃の遺跡の状況は、任海鎌倉遺跡のみで、その遺物もきわめて少ない。また、それ以前の11世紀から12世紀前半期には遺跡はほとんど認められない。このことは「新保御厨」との結びつきが非常に薄いことを示すと考えられるが、その正否については今後の調査の成果を待ちたい。

年代 遺跡	奈 良	平	安	鎌 倉	室 町		
	800	900	1000	1100	1200	1300	1400
任 海	■■■	■■■			■		
吉 倉 B	■■■	■■■					
任 海 砂 田	■■■	■■■					
任 海 鎌 倉		■	■		■		
南 中 田 D	■■	■■■	■■■		■■■■■	■■■■■	
栗 山 楢 原	■■■	■■■					
南 中 田 C		■■					
南 中 田 B	■■■	■■■			■■■		
吉 倉 A					■		

遺跡の形成年代

富山県総合運動公園内遺跡試掘調査報告書

編集・発行 富山市教育委員会
富山市新桜町7番38号
発行日 平成元年3月31日
印刷所 中村印刷工業株式会社